

今月のみことば 2018年9月

「あなたがたのいのちとは、どのようなものでしょうか。あなたがたは、しばらくの間現れて、それで消えてしまう霧です。あなたがたはむしろ、『主のみこころであれば、私たちは生きて、このこと、あるいは、あのことをしよう』と言うべきです。」(ヤコブの手紙4章15, 16節)

昨年(2017年)はルターによる宗教改革からちょうど500年という節目の年であった。もし宗教改革がなければ、聖書はその後も封印されたままで、迷妄の時代がもっと長く続いていたに違いない

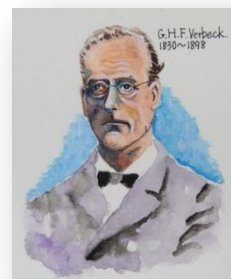
しかし、宗教改革の中心にいたルターは、始めから聖職者を目指していたわけではなかった。父の希望もあり、法学者、また弁護士として身を立てることを期待されていたのである。学業も優秀であり、将来は約束されているかに見えた。

ところがそのルターの運命を変える出来事が起きた。突然の落雷で死にそうになったのである。親友が雷に打たれて死んだという出来事もあいまって、ルターは恐怖におののき、とっさに、もし命を助けてくださるなら聖職者の道に進みます、と神に誓った。その後、ルターは両親の反対を押し切って修道院に入って修行を重ね、その学殖を見込まれて大学で聖書の講義をするうちに「信仰義認」の真理に目覚め、ヨーロッパ全体に聖書信仰のうねりを起こすことになった。聖書のみを権威とするプロテスタント主義の誕生が、ヨーロッパを揺り動かす大事件となったことは周知の通りである。



もしその日、その時、ルターのそばに雷が落ちなかったら、私たちが知る宗教改革はなかったことであろう。落雷によって世界史が変わったと言っても過言ではない。

フルベッキというオランダ系アメリカ人の例も興味深い。彼はコレラで危うく死にそうになった。医師もさじを投げた。その病床でフルベッキは祈った。「もし神が自分を生かしてくださるなら、開国間近い日本に行って、キリストの福音を伝えます」と。



フルベッキの容態は改善した。彼は神との約束に従い、まだ開国前の日本に行き、宣教の機会を探る。そして後に、明治維新の中心となる若者たちから絶大な信頼を得て、彼らを世界に通用する人物に育て上げたのである。キリシタン禁令を解くために遣欧使節団を岩倉具視に進言し、明治6年に禁令が解かれるもとを作ったのもフルベッキであった。

彼もまた、死に直面して大きな使命に目覚めた人と言えよう。もしフルベッキが、若い日にコレラに罹らなければ、幕末から明治にかけての歴史は、おそらく大分異なったものになったはずである。

人は落雷やコレラで死ぬだけでなく、蚊やアリに刺されて死ぬケースさえ報告されている。思わぬ事件や事故に巻き込まれることもある。実は、私たちの毎日は死と隣り合わせなのである。ルターもフルベッキも死に直面したことで、突然、自分中心の生き方から神に従う生き方に追い込まれた。危機のおかげで、神に目を向け、自分の使命を知ることができたのである。

人は落雷を、またコレラ罹患を偶然の出来事と言うかもしれない。しかし本人たちは真顔で、「偶然ではなく、神の摂理であった」と言うのではないだろうか。